

2309 離島覚書（鹿児島県・薩摩黒島）



「ウキペディア」より引用

令和5年5月23日

三島村役場

黒島という名の有人島は全国に7つもあり、「大島」に次いで多い。山口県岩国市、長崎県の松浦市、小値賀町、五島市、大分県臼杵市と鹿児島県竹富町、そして鹿児島県三島村である。他の黒島と区別するため、「薩摩黒島」とも呼ばれている。

三島村は文字通り竹島、硫黄島、黒島の3つの島で構成されるが、面積は黒島が最も大きく、人口も最も多い。面積は15.39km²、周囲は20.1kmである。島はリュウキュウチクの竹林や照葉樹に覆われ、沖から見ると黒く見えたことが、島名の由来だという。

黒島には大里と片泊の2つの集落が島の東側と西側にあり、両集落は島の北側を走る県道221号と南側の村道によって結ばれている。県道と村道を通ると島を一周できる。

黒島はほぼ丸い形をしており、その中央部に^{やぐらだけ}櫓岳(620m)がそびえ、豊かな森と水から「ミニ屋久島」とも呼ばれている。喜界カルデラの縁に位置する竹島や硫黄島よりも古い火山島で、島の周囲は波によって浸食され、海蝕崖が続く。

5月8日から新型コロナが2類から5類に引き下げられ、乗船に必要な3日以内のPCR検査が不要になったのを見計らって黒島を訪ねることにした。黒島行のフェリーは鹿児島港を9時30分に出航する。8時までに搭乗手続きをしなければならぬので鹿児島市内に前泊した。黒島の民宿は光ケーブルの工事関係者が8月ごろまで滞在しているため満室で、仕方なく三島村役場をお願いして大里地区にある「大里ふるさとセンター」に泊めてもらうことにしていた。

鹿児島空港からレンタカーを借り、鹿児島港近くの三島村役場を訪ねる。十島村と同様、役場は村内にはなく、鹿児島市内に置かれている。最初に宿泊を電話でお願いした総務課の江口さんという女性を訪ねる。隣の産業課で畜産関係のデータをもらい、1階の漁協で漁業

の概要などを聞き、3階の教育委員会で小中学校の最新のデータを入手した。

黒島には飲食店も商店もない。「大里ふるさとセンター」は公民館で食事の提供はないから2泊3日分の食料を持っていかなければならない。近くの「ニシムタ」というスーパーで食料を買い込んだ。港に最も近い「アクアガーデンホテル福丸」に泊まる。

鹿児島港と黒島を結ぶ「フェリーみしま」(1,859 トン)は基本的に週に4回通う。黒島の片泊に停泊する1泊2日の便と日帰り便が、原則として週に2回運航され、1日の休みを挟んでこの運航が繰り返される。



黒島の全景（左）、唯一の交通手段「フェリーみしま」（右）

平和5年5月24日

平家伝説と遺跡

9時30分に鹿児島港を出港した「フェリーみしま」は竹島、硫黄島を経由して15時10分に黒島の片泊港に着いた。本来なら大里港に寄港するのだが、あいにくこの日は干潮時にあたり、水深が浅くなっていたため抜港になったのだ。

片泊港から集落への道は急勾配で、初めての土地だったから、前が見えないほどの急坂に面食らう。海拔20mほどの場所に日露戦役記念碑が置かれていた。片泊出身の最初の軍人が日露戦争に出征して無事帰還したことを記念し、本人(木村政太郎)が石に刻んだものだ。この小さな島から大国ロシアに勝利した歴史的戦争に参加し、帰還したことは島の榮譽だったのだろう。この石碑から上の急斜面に片泊の集落が形成されている。

県道を走り、宿のある大里に向かう。約9kmの道のりだ。後述する小説「私は忘れない」の著者である有吉佐和子は舁で片泊に上陸後、牛の背中に乗って大里に行ったそうだ。

大里に向かう途中で、「平家の城跡」と書かれた案内板が現れた。断崖絶壁の下に半月形のテラス状の地形があり、源氏との争いに敗れた平家の落人が黒島に上陸した最初の居住地とした場所らしい。壇ノ浦で敗れた平家の一団は長崎沖から天草、出水、甕島、阿久根、樋脇、枕崎に逃げ、沖に見える黒島を安住の地として船を漕ぎ、たどり着いたのが黒島だというのだ。まもなくこの場所を離れて、一部の者は山を越えて中里方面に移住、さらに海を求めて下った先が現在の大里だという。また一部の者は海を泳いで片泊に着き、永住の地とした。そして大里は上位の者(公達)、片泊は下位(武者)の者に分かれて集落が形成され、その時のしこりが現在も残るらしい。

この平家城跡とされるテラス地形の場所は2009(平成21)年に鹿児島国際大学が測量調

査を行い、2010 年～2015 年にかけて同大学と三島村が協力して発掘調査を行っている。中国陶磁器を始め、南西諸島に広く分布する「ヤムイヤキ」と呼ばれる徳之島産の須恵器、石鍋片などが出土した。これら陶磁器は 11 世紀後半から 13 世紀前半のもので、それ以降の物は出土しなかったことから、この場所に住居があったのは 13 世紀前半までに限られると結論付けている。なお、微量ではあるが、縄文時代後期の物も出土していることから、黒島は縄文時代から人が居住していたことが明らかになった。

晴れていれば、薩摩半島の枕崎から黒島をみるできるので、丸木船があれば本土から黒島に渡るのはそれほど難しくなかったのではないかと想像される。



遺跡調査が行われた平家城遺跡とされるテラス（左）、遺跡を登ったところにある県道沿いの案内板（右）

大里ふるさとセンター

大里ふるさとセンターは集落のほぼ一番上にあり、1992（平成 4）年 5 月に完成した。鉄筋コンクリート 2 階建てで、延べ床面積は 741 m²である。総事業費は 2.7 億円であった。

センターの入口には白御影石 2 個を組み合わせた有吉佐和子の「私は忘れない」の文学碑が建つ。センターと文学碑の落成式は同時に行われた。「私は忘れない」は有吉が 1958（昭和 33）年の取材をもとに書いた新聞連載小説で、その後中央公論社から出版され、1969（昭和 44）年に新潮文庫になった。1960（昭和 35）年には松竹映画にもなり、現地ロケも行われ、大里小中学校の児童・生徒が出演している。この時の写真や新聞記事がセンターのホール壁に張られていた。ロケが行われたのは私が中学 1 年生の歳だから映画に出た子供たちはほぼ同世代の人たちということになる。当時の島の人口は約 600 人で、子供は 100 人ほどだった。当時港はなく、ロケ班は舢舺で上陸した。黒島に船が直接接岸するようになったのは、これよりもずーと後の 1975（昭和 50）年 1 月 20 日のことである。

有吉は岩波写真文庫の「忘れられた島」を見て、この小説を着想したと思われる。写真文庫は竹島、硫黄島、黒島の戦後間もない時期に撮影された写真集であるが、写真文庫のタイトルのアンチテーゼとして「私は忘れない」を小説の題名にしたのだろう。有吉は島が好きだったので、その後、御蔵島を舞台にした小説「海暗^{うみくら}」も書いている。

センターの 1 階は診療所、養護施設、調理室、浴場があり、2 階は舞台を備えた大広間で、畳が敷けるように大量の簡易式畳（軽く一人でも運べる）が隅に積まれていた。案内されたのはこの大広間で、入口の近くに畳が 5～6 枚敷かれ、布団と枕が用意されていた。ちなみに料金は 1 泊 2,000 円であった。

2日間の滞在中は歯科の移動診療の期間で、鹿児島から移動診療バスとともに歯科医がやってきて大里地区の住民の治療にあたっていた。また25日は月に2回の日赤鹿児島赤十字病院の診療日でもあり、センターは人の出入りが激しかった。

夕方、出張所長の日高義昭さん（64歳）が来て、シャワーの使い方、電灯のスイッチの位置、調理場の配置などを教えてくれた。有吉の「私は忘れない」は読んでいなかったの、「蔵書はないか」と尋ねると、確かあるはずだといって本棚を探してくれたが見つからない。夜になって古びた文庫本をどこかで調達して持ってきてくれた。滞在中に読破すべく、飛ばしながら速読した。缶ビールを2本購入してきたが、日高さんに聞くと集落到酒屋だけはあるという。喉が渴いたので2本とも飲んでしまい、唯一の酒屋に車で連れて行ってもらった。外見は普通の民家で日高さんはわざわざ家の中に入り、ビールを買ってきてくれた。



大里ふるさとセンターの建物（左）、有吉佐和子の文学碑（右）

大里の集落

令和5年5月1日現在の三島村の人口は367人、世帯数は203戸である。このうち黒島が178人（98戸）で最も多い。なお1960（昭和35）年の人口は527人だったから、当時の1/3ほどに過ぎない。地区別では、大里が106人（65戸）、片泊が72人（33戸）である。

集落は大里港背後の急斜面に形成されている。センターから坂を下っていくと、下校途中の小学生の一団に遇った。最も高い位置に後述する「しおかぜ留学生」の宿舎があるので、そこへ帰るのだろう。子供たちに道を聞くと、背の高い利発そうな女の子が集落内の道を教えてくれた。

T字路を左折したところに「黒尾大明神」という神社が置かれていた。少なくとも400年以上前に創建されたらしい。御神体は大小13の石だという。案内板には天正のころ、薩摩藩を名乗る海賊が現れ、社殿の財宝や平家の系図を盗んで行ったと書いてあった。

島内放送で、「これからサツマイモの苗を出張所の前で配布します」とアナウンスがあったので、集落の中心に位置する出張所に行った。出張所は2階建てで1階には郵便局も入っている。出張所の前では、本土から運ばれてきたサツマイモの苗を注文した人たちに配っているところだった。「ベニハルカ」という品種だという。受け取りに来た人はほとんどがおばあさんだった。役場出張所の下に三島大里学園がある。元の三島村立大里小中学校だ。

学園から急坂を下ったところが地方港湾の大里港である。港湾内の一番奥の漁船溜まりには「海相棒」と「華帆海丸」という2隻の漁船が係留され、この他に4隻（第2喜久美丸、

廣洋丸、喜龍、まれ)の漁船が陸置きされていた。地べたにはイセエビの刺網が置かれ、船を陸揚げするためのデリック、台車、斜路、製氷施設が整備されている。

そこにちょうど三島村所有の「みしまⅡ」が入港してきた。しばらくすると芋焼酎の工場前で遇った鹿児島県庁の職員3人と三島村の担当者がやってきた。視察に訪れた県職員を村の担当者が案内していたのだが、黒島に泊まる場所がないため、村の船で硫黄島に移動するところだった。彼らを見送った後、再び急坂を登る。

坂の途中に「特攻隊の碑」と書かれた小さな石碑が置かれていた。黒島近海に不時着し再び本土の基地に戻り、南方に再出撃して散華した安部正也さんの慰霊碑である。

続いて「黒尾大明神」の先を直進し、大里運動広場を訪れた。ここは島で最も広い平らな場所だ。一面に芝生が張られ、片隅に大里学園の体育館、島の青年の会合場所として作られたログハウス風の青年の家、そして平等大慧会^{おおにえ}という宗教団体の妙塔が建つ。また反対側には倉庫とビニールハウスがあり、ハウス内ではサツマイモの苗が作られていた。平等大慧会は広島に本部を置く宗教団体で、戦後発足した。本部の他に全国4ヶ所に施設を有しており、黒島の妙塔はその一つである。広場で会った島外で病気治療をされていて最近戻って来た女性の話では、コロナ渦前までは毎年信者が訪れ、民宿に分宿して参拝に来ていたという。彼女はハマボウフウの新芽を手にしていて、天ぷらにすると美味しいらしい。

広場は垂直に切り立った崖の上にあり、ここから竹島、硫黄島が並んで見えた。また薩摩半島の枕崎もかすかに見える。



大里の集落と港湾（左）、大里運動広場の脇に建つ平等大慧会妙塔（右）

令和5年5月25日

黒島平和公園

西に位置する黒島の日の出は5時ごろだった。センターの大広間の窓側は東を向いているから、日の出とともに目が覚めた。もともと熟睡できる環境ではなかったのでやむを得ない。前日のメモをパソコンに入力し、「私は忘れない」を読む。7時15分には診療所の看護師さんが出勤してきた。この日は月に2回ある巡回診療日に当たっていたからだ。マスクとお茶で朝食を済ませ、7時30分にセンターを出発し、島を時計回りに走ることにした。

この島はツワブキがやたらと多い。道の脇の土手はツワブキで覆われている。そしてその上部にリュウキュウチクが分布する。所々に狭い区画の畑があるが、周りをリュウキュウチクが取り囲んでいるところが多く、侵入するリュウキュウチクの駆除はさぞかし大変だろ

う。

黒島平和公園に登る坂道の途中に米盛建設㈱の事務所と宿舎があった。島外資本（本社：鹿児島市）の建設会社で、ここで働く人は島外から主に来ているらしい。ちなみに黒島では上述した光ケーブルの敷設工事の他に、県道の3ヶ所で道路工事が行われていたから、建設需要は多い。

大里港と大里の集落を一望できる見晴らしのいい場所に黒島平和公園がある。この公園は大東亜戦争末期に海軍特攻兵として出陣し、黒島沖に不時着した海軍少尉江名武彦さんと陸軍少尉柴田信也さんが2004（平成16）年に平和観音像を建立したことを契機としてできた公園である。翌年から特攻平和記念祭が始まり、2006（平成18）年にはさらに「平和の鐘」もつくられている。なお、センターの大広間の舞台には「特攻平和記念祭」の横断幕がそのまま残っていた。今年は5月13日に開催されたようだ。戦没者への哀悼に「平和の鐘」を3つたたいた。

公園の入口に大東亜戦争で亡くなった三島村の戦没者の名前が刻まれていた。竹島7人、硫黄島17人、大里5人、片泊15人であり、合計44名が亡くなっている。また米軍機空襲による犠牲者として硫黄島7人、竹島3人、片泊1人、大里1人の合計12人の名前が記されていた。三島村でも米軍による空襲があったことを始めて知った。

平和観音像の碑文には次のように書かれていた。

「大東亜戦争の末期に当る昭和20年4月の米軍沖縄侵攻から6月の沖縄玉砕までの3ヶ月、2千名に及ぶ20歳前後の若き特別攻撃隊員が鹿児島県下、陸軍は知覧、万世、海軍は鹿屋、串曳等の基地から飛び立ち、沖縄周辺の敵艦船に爆弾もろとも体当たり攻撃を敢行戦死していった。特攻機の多くは、トカラ列島で待ち構える敵戦闘機を避け、南薩山川より黒島經由針路215度で南に、沖縄の西側海面から突入したが、途中の黒島冠岳上空で水平線上に遠さかる秀峰開聞岳を見返り、万感の思いで内地に決別し、祖国の安寧平和を祈り、親兄弟の多幸を念じて、大海原の雲流れる果てに敢然と征き、祖国の危急に準じた。ここに今日の平和の礎となった特攻隊員の散華の歴史と平和の尊い意義を後世に伝え御霊のとこしえに安らかならんことを祈念して特攻平和観音を建立する所以である。」

また、戦艦大和の鎮魂碑も2013（平成25）年に建てられている。戦地に赴く大和の航跡図が掲げられていたが、黒島沖を通過して東シナ海に向かい、米軍の集中攻撃を受けて撃沈された。公園の一番上には江名さんが建立した小さな神社も建つ。



特攻平和観音（左）、平和の鐘（右）

平和公園から大里沖の海面を見ると、昨日から大里港に沖合にいた漁船2隻はほぼその

ままの位置にいた。どうやら船の上で一夜を過ごしたようだ。さらに港内には3隻の漁船が新たに横付けされていた。そのうち、朝、黒島片泊港を出発したフェリーが入港し、しばらくして出ていった。

平和公園の脇の坂を登り詰めたところには薩摩黒島灯台が立っている。

笹牧場

村道の路傍では3人の男女が刈払機と鎌で侵入してきたリュウキュウチクや草を刈っていた。黒島の道路はこうして手入れが行き届いているので、比較的走りやすい。

県道と村道の両側はリュウキュウチクに覆われており、一部は黒牛の放牧場になっている。ただし自生するリュウキュウチクが牛の餌で牧草地はほとんどない。リュウキュウチクは竹ではなく笹に分類されるが、この笹を餌として牛を飼う地域はこの三島村と十島村にほぼ限定される。十島村の一部の島では笹を取り除き、牧草に替える事業も始まっているが、昔からこれらの地域ではもっぱら笹が餌だった。ちなみにこのリュウキュウチクの筍は「大名竹」と呼ばれて商品化され、島の数少ない特産品となっている。

牧場の道路脇には水飲み場や餌場（輸入した配合餌料や干し草を食べさせる）が整備されている。新しく餌場を建設中のところも数ヶ所あった。

黒島における牛飼いの歴史は昭和初期に遡る。大里では昭和初期から「野つなぎ牛」の飼育を行っていたが、1938（昭和13）年にカムゴウ牧場をつくり、1941（昭和16）年には尾平瀬牧場の施設が完工している。6人が共同して野放しで14頭の牛を飼養し始めた。一方、片泊では1930（昭和5）年に3人が黒牛3頭を飼い始めている。

現在の黒島の畜産農家は15戸である。大里地区が10戸、片泊地区が5戸という内訳になる。現時点の黒島の飼養頭数は402頭で、このうち285頭が親牛である。黒毛和牛の子牛を生産する繁殖であり、肥育は行っていない。2022年度の子牛の出荷数は151頭（大里：93頭、片泊：58頭）で、生産額は7,363万円であった。この金額は三島村全体の生産額の約半分に相当する。1頭当たりの平均価格は片泊が51.7万円、大里が46.9万円でかなり差があった。

途中の林道の道端で別途栽培している草を刈り採って牛に与えている人がいた。80歳になるというが元気である。ここは塩手牧場という所らしい。この牧場には所有者の異なる黒牛が放たれている。牛は笹よりも草を好むらしく、7頭ほどが群がっていた。彼の所有する牛は3頭なので、自分の牛が優先的に草を食べられるように割って入って来る牛を棒で追い払っていた。この中には雄牛が1頭混ざっていた。人工授精しにくい雌牛に「生」で受精させるらしい。

彼は漁師も兼業しているが、イセエビがメインの漁獲物で現在は禁漁期にあたることから漁船は陸揚げしているという。磯釣りもするが、黒潮の大蛇行が始まってからカツオは入ってこなくなり、他の魚も少なくなっているという。

この中に妊娠中の雌牛がおり、7～8月に出産を控えているという。出産の前には牛舎に連れて帰って出産させ、子牛も牛舎内で育て、生後10ヶ月ほどで出荷する。出荷先は伊集院の鹿児島中央家畜市場である。子牛は配合餌料を与え、輸入利用への依存度が高いため、円安で飼料代が上がり、経営的には厳しくなっているらしい。

このように現在の黒島の最大の産業は子牛の繁殖である。しかしもともと黒島は焼畑で粟、稗、麦を栽培する自給自足の生活をしていた。江戸時代中期に甘藷が伝わるまでは厳しい生活が続き、「餓山」（姥捨て山）の伝説が残る。日高さんによると、わずかな田んぼがあり、主として糯米を作っていたが、子供のころは一年のうち米を食べるのはいくらもなかったという。



笹牧場に放牧されている黒牛（左）、刈り取った草を与える老人（右）

白衣観音と塩手鼻

村道から離れ、塩手鼻に向かってつづら折りの長い坂を下っていくと、白い観音像が置かれ、碑文が書かれた石碑がたっていた。この像は枕崎市長田代清英氏が彫像して寄付されたもので、1989（平成元）年にこの地に建てられた。1895（明治28）年7月に黒島近海で操業していた枕崎のカツオ船団が遭難し、411人が犠牲となったが、犠牲者を慰霊するとともに海上安全を祈念したものである。この事故は「黒島流れ」と呼ばれた。

この海難事故のことをネットで調べると、田畑休八さん（私よりも13歳ほど年下の62歳前後と推定される）の「休八ノート」の中でこの「黒島流れ」のことが書かれているのを見つけた。著者の曾祖父の兄弟5人は、この海難事故で亡くなっている。以下「休八ノート」からこの事故の概要を紹介しておこう。

1895（明治28）年7月24日、豆台風が発生し、天候が短時間の間に急変、黒島の北側海域で操業していた枕崎と坊津のカツオ船34隻が沈没、漁師713名が亡くなったものだ（碑文に書かれていた411人は枕崎の漁師の数で、坊津を入れると713人になる）。当時のカツオ船は帆船で迅速な避難が難しく、かつ黒島にはまともな港がなかった。強い風と波に押されてカツオ船は黒島の近くまで流される。黒島は切り立った崖が多く、浜はほとんどないから、カツオ船は激しく波にもまれて岩礁に乗り上げ、次々に転覆していった。ほとんどの漁師は海に投げ出され、黒島西端の片泊の塩手鼻やユキノ瀬に打ち上げられたという。黒島の人々は流れ着いた遺体を茶毘に付し、30名ほどの生存者を救助し、手当をするとともに食事を提供した。当時、鹿児島県にあったカツオ漁船は61隻だったから、この海難事故で過半数を失ったことになり、歴史的な大海難事故であった。

枕崎市ではこの「黒島流れ」のことを小学校で習うそう。そして1981（昭和56）年からは「枕崎市少年の船」を出し、洋上慰霊祭を行い、黒島と枕崎の交流が続いている。

白衣観音からさらに下ると行き止まりになり、小さな駐車場があった。そこから歩いて海

に出たところが塩手鼻である。目もくらむような断崖絶壁に板状節理の白い岩肌が露出している。階段に沿ってロープが張られているので、下に降りていくことができるが、海からの風が強く吹き上げ、危険な状態だったので、下まで降りるのはやめた。

再び村道に戻ると立山牧場があり、牛が3頭いた。近くのきよはる公園から片泊港及び集落を撮影し、片泊の集落に向かう。



白衣観音の由来が書かれた石碑（左）、塩手鼻の板状節理（右）

片泊集落

片泊の集落は片泊港背後の急斜面に形成されている。集落の最上部に三島村役場の片泊出張所が置かれ、大里と同様、簡易郵便局が併設されていた。

ヘアピンカーブを回り、細い路地を入ったところに村立三島片泊学園があり、狭いグラウンドの脇にはプールも整備されていた。学園の下に「片泊ふれあいセンター」がある。「大里ふるさとセンター」と同様、住民の集会等に使われている施設でいわば公民館に相当する。ここも宿泊が可能で、当初こちらへの宿泊を希望したが、やはり工事関係者が泊まっており、満室であった。センターの駐車場に車を停めて、集落内を散策する。

港へ下る坂道の両側に住宅が点在するが、教員用の村営住宅が目立つ。教員住宅の玄関の扉には「ようこそ片泊へ ○○先生」と書かれた紙が貼られているから、どの住宅に教員が住んでいるがわかるわけだ。

直近の住基台帳上の人口は72人、世帯数は33戸である。教員は11人いるから、教員の世帯数は11戸になる。差し引き22戸が教員以外ということだ。また集落内に3つの民宿があり、これを除くと、在来島民の住宅は19戸に過ぎない。すでに空き家になった建物、あるいは草木に埋もれた廃屋などが目立つ。

集落の一番下に数軒の家が固まっているが、その奥まったところに菅尾大明神社がある。片泊地区の祖先の霊を祀った社で、1629（寛永6）年以前の創建といわれている。この神社の御神体は鏡2面と自然石16体とのことで、神社の脇に大小様々な石が置かれていた。

先に示した日露戦役記念碑の下段にヘリポートが整備されている。そこから急坂を下ると片泊港である。片泊港は南東方向に250mほど防波堤が延びただけの港なので、静穏度は悪い。このため、2隻の漁船（睦美丸、パール）が陸揚げされているだけだった。後述するように片泊地区所属の比較的大きな漁船は大里港を拠点にしている。

昼になったので、一旦大里のセンターに戻って昼食を食べることにした。片泊港から坂を

登り、役場の出張所を過ぎた先に比較的新しい家が1軒建ち、さらにその先に民宿^{いちご}一五川があった。なお、片泊集落には「さら」「みなみん風」という民宿と「3515」^{さんごじゅうご}というゲストハウスがある。その先に比較的大きな牛舎が4棟あり、奥は放牧地になっていた。



片泊港と片泊の集落（左）、片泊ふれあいセンター（右）

片泊学園と大里学園

ここで片泊と大里にある学園について記しておこう。

三島村には村営の小中学校が4校あったが、現在は何れも「学園」を名乗っている。2016（平成28）年の学校教育法の改正により、義務教育学校が制度化された。この法律改正によって初等教育と中等教育の一部の合計9年間の課程を一体化させた学校を義務教育学校としたものだが、教育課程や学校運営が設置者によって柔軟に運用できるようになったと言われている。三島村では2020（令和2）年4月に小中学校を廃止し、義務教育学校に移行した。この措置に伴って、小学校は前期課程、中学校は後期課程と呼ばれるようになり、1～9年生の呼称が採用されている。そして片泊、大里ともに「学園」に名称変更された。

令和5年5月1日現在の大里学園の児童生徒数は16人、うち留学生は6人、教員数は14人である。一方片泊学園の児童・生徒数は20人、うち留学生は3人、教員数は11人である。黒島全体の児童生徒数は36人、このうち島外からの留学生が9人になる。先生の子供もいるから、在来島民の児童生徒は半分ほどだろう。

島外からの留学生の受け入れは、「しおかぜ留学」と呼ばれ、人口減に伴う子どもの減少に直面し、何とか学校を残そうとのねらいから1997（平成9）年にスタートした。現在、小学校4年生から中学3年生までが「しおかぜ留学」の対象である。もとは島の各家庭で児童生徒を預かっていたが、島民の高齢化に伴って受入れ先がなくなってきたことから現在は寮が整備されている。なお、留学生の食費等の実親負担は月25,000円である。

ところで日本の小学校のほとんどは明治初期に創立されているが、三島村の場合は50年遅れて1930（昭和5）年に初めて学制が敷かれた。それまでは大里出身の日高晋勢（新左衛門）によって創立された私塾であった。

村立三島片泊学園は集落の高台に置かれ、校門の前にはサツマイモの苗が植えられている。校庭は狭く、その奥にはプールが整備されている。一方、村立三島大里学園は逆に集落の一番下にあり、こちらにはプールはない。校門の前には、映画「私は忘れない」のロケが行われたことを示す案内板が立っていた。



三島片泊学園の校舎（左）、三島大里学園の校舎（右）

林道

センターに戻り、チキンバターカレーの缶詰とクラッカーで昼食を済ませる。午後から島の内陸部を走ることにした。

大里の集落を過ぎた県道沿いに九州電力黒島発電所がある。島の北側を通る県道の中里から島の南側の塩手に抜ける林道が整備されており、森林管理道中里線という。この林道は主峰櫓岳（622m）、横岳山（590m）、カムゴ山（569m）の山麓を取り囲むように整備されている。最初にこの道を通って島の山岳地帯を縦断した。道路は完ぺきに整備されていて通行に問題はない。

途中、櫓岳に登る大里側の登山口があった。出張所の日高所長は、最近登山道の草刈りは行われていないし、登山する人もいないから、山道は荒れていて登るのは無理ではないかと言っていた。徒歩で登山道の様子を確かめてから、そのまま通過した。

黒島の標高の低いところはリュウキュウチクが圧倒的に優占していて竹島と同様、竹林で覆われているが、この竹林よりも標高の高いところは山岳地帯となっており、スダジイ、アカガシなどの照葉樹林を形成している。この黒島特有の森林は「薩摩黒島の森林植物群落」として国の天然記念物に指定されている。道路脇のあちこちに桜色をしたツツジが可憐な花を咲かせていた。旅から戻って調べたところアラゲサクラツツジという。

塩手から村道を大里方面に戻り、南側の尾平牧場付近から林道黒島中央線を片泊方面に抜ける。この道は未舗装の部分が約半分を占めており、しかも車はあまり通っていないようで、轍の中央の草は伸び、車体の底をひっきりなしに擦ることになった。怪しい箇所では車を降りて徒歩で先行し、先を確かめながら進んだ。

そうこうしていると、野生のヤギの一群が突然車の前に現れた。6～7頭はいただろう。野生のヤギが島に生息しているとは思っていなかったのが、突然の出現に驚いた。一群は谷に向かって降りて行った。帰りのフェリーを待っている時に、子ヤギを連れた人が港にやってきたが、その子ヤギは数日前に網で捕まえた野生のヤギだという。島にヤギが増えすぎたため、村が駆除に乗り出し、相当減ったが現在再び増えてきているとその人は語っていた。

かつて黒島では炭焼きがさかんだった。燃料を炭に依存していた時代は、この豊富な森林資源は炭焼きの原料として利用され、外貨稼ぎに貢献、林道も役立っていたに違いない。

道端の草を刈った後にリュウキュウチクが筍を出していた。太そうなものを今晚の酒の

つまみに採取した。センターの調理場で湯がき、味噌炒めにして食べた。しかし少し固かった。日高さんによれば、「大名竹」として出荷するものは竹林の中でもある程度整備された所で採ったもので、こちらは柔らかくて美味しいが、道端の筍は普通食べないという。



櫓岳と山岳地帯（左）、満開を迎えていたアラゲサクラツツジ（右）

令和5年5月27日

みしま焼酎・無垢の蔵

朝一番で大里と片泊のほぼ中間に位置する「みしま焼酎・無垢の蔵」の工場に行くと、杜氏兼管理者の坂元^{こうせい}巧齋さん（31歳）が事務所にいた。施設を見学し、芋焼酎造りについて話を聞く。

坂元さんは始良市の出身で、鹿児島大学理学部物理学科で天文学を学び3年間高校の物理の先生をしていた。三島村の地域おこし協力隊に応募して採用され、6年前から黒島に来ている。自前の芋焼酎造りを担うためだった。当初、いちき串木野市の焼酎メーカー・濱田酒造(株)のシフトに入れてもらって、焼酎造りを学び、その後、子会社で黒麹の仕込みを体験し、醸造技術を習得した。素人が一から始めるのは大変だったから3年間は濱田酒造から技術支援を受けたという。

三島村では当初、黒島で採れたサツマイモを原料に島外の濱田酒造(株)に製造を委託し、2005（平成17）年から「芋焼酎みしま村」を販売していた。2017（平成29）年度の税制改正で「焼酎特区」が創設されたことから島内で独自に芋焼酎を生産することになり、特区認定を受けて2018（平成30）年9月にこの工場が落成した。工場の床面積は402㎡で、総事業費は2.2億円であった。

ここで造られている焼酎は「みしま村」と「メンドン」の2種類のブランドである。前者は黒島産、後者は硫黄島産のサツマイモを原料とし、米麹の配合も若干異なる。原料のサツマイモの品種は「ベニオトメ」で、大里老人会の協力を得て、山の畑で栽培している。栽培面積は30aほどだ。

特区で許可されている焼酎の生産量は10kl以下である。1回の仕込みで造れる量は1klだが、実際の生産量は7仕込みほど、つまり7klで、これは4合瓶換算で7,000本ほどに相当する。

芋焼酎の醸造工程は2段階で構成される。最初の工程は麹づくりであるが、黒島では黒麹が使われている。蒸した米に黒麹をまぶし、2日間かけて麹菌を繁殖させる。1次発酵はこ

の麴に仕込み水と酵母を加えて6日間かけて醪をつくる。酵母菌はK2（鹿児島2号）という品種が使われている。この醪に蒸したサツマイモをミンチにして、醪1に対しサツマイモ5の割合で加え、9日間2次発酵させる。1回の仕込みに使用するサツマイモは1,200 kgで、4回に分けて蒸し、600 kgずつ2回に分けて醪に加える。

2次発酵を経たものを、直接蒸留し、素焼きの中国甕に貯蔵する。1回の仕込みは1甕に相当するようだ。この甕が20個あるので、20仕込み分の貯蔵が可能である。芋焼酎の醸造は秋から冬にかけてで、この時期が最も忙しい。工場では坂元さんの他に地域おこし協力隊員が1名と地元のパート（多い時で5人ほど）が働いている。施設の所有者は三島村なので、忙しい時は役場の職員も応援に来るらしい。

酒粕は肥料として畑にまいているが、酸性のため石灰で中和する必要がある。大量に発生する酒粕の処理方法がこれからの課題だという。

芋焼酎は4合瓶が1本3,600円である。いい値段だ。重いので180mlの小瓶（900円）を1本購入した。ここの芋焼酎はクセ（雑味）がなく、あっさりしていて万人受けする。しかし少量生産なのだから、青ヶ島の「青酎」のように個性的焼酎に徹し、プレミアムが付くように分留を調整したらよいと思うのだが。



みしま焼酎無垢の蔵の工場（左）、杜氏兼経営管理者の坂元さん（右）

墓地群と大里遺跡

「無垢の蔵」から役場の出張所に行き、フェリーの切符を購入する。日高さんに墓地の場所を教えてもらう。墓地は出張所から坂を100mほど登り、道路脇の階段を登った木立の中にあった。墓地の最上段には五輪塔の墓石が5基並ぶ。その下には何代にもわたる歴代住職の墓石が並んでいた。「当寺七世榮山玄軋知蔵禅師」と書かれた墓石は寛政10年と刻まれていた。1798年に相当する。初代の墓は確認できなかったが、少なくとも18世紀初頭には寺があり、墓地が作られたものと推定される。

1868（慶応4）年、明治新政府の太政官は、これまであたり前であった神仏集合状態を解消するために神社と寺院を分離させる神仏判然令をだす。それが最も激烈だったのが薩摩藩で、鹿児島県では徹底した廃仏毀釈が進められ、寺院は全て廃止され、記録や古文書、仏像、墓などが徹底的には破壊されたのである。したがって、黒島の地にこのように古い墓地がそのまま残されているのはきわめて珍しい。つまり激烈を極めた廃仏毀釈による寺の破壊は黒島には及ばなかったことを示している。

墓から戻って日高さんに話を聞くと、日高さんの家は神道とのこと。また昔近くに寺があったようだが、今はないという。もともと土葬だったので、島を離れた人などの遺骨は墓地内に共同墓地を作ってそこに納めているとのことだった。

続いて遺跡を発掘した場所を教えてもらった。出張所のすぐ隣の畑であった。発掘した場所はもとに戻され、里芋やキュウリが植えられていた。上述した黒島平家城遺跡の他に大里の集落でも鹿児島国際大学によって発掘調査が行われていたのである。この土地は昔の代官の家があった隣だそう。江戸時代、黒島は島津藩の領地であり種子島氏が統治しており、代官屋敷がこの大里に置かれていたのである。

同大学の報告書によると、大里の遺跡からは、①縄文時代後期から晩期（約 4,000 年から 3,500 年前）、②平安時代後半から鎌倉時代にかけての中世初期、③鎌倉時代から今日まで、の出土品が見つかっており、現代まで途切れることなく集落が営まれていたとしている。

第 1 次調査では、平安末期から鎌倉時代初期にかけての中国から輸入された陶磁器を始め国内各地の土器が海を越えて遠くからもたらされた品物が出土している。また 2 次調査では政所（案内された畑のある土地）と呼ばれる場所で調査が行われ、ここから上述した陶磁器や中国瓦、宋銭などが見つかり、中世の漁網用の錘も出土している。

つまり黒島は古くから開かれていた場所だった。今は僻地の寒村になっているが、時代の先端を走っていたこともあったのだ。



墓地の上段に配置された五輪塔（左）、発掘調査が行われた現場（右）

島外漁船

大里の墓石群を見てから坂を下って大里港に降りていく。港の奥の漁港区域には「海相棒」（6.6 トン）という島では最も大きい漁船が係留され、2 番目に大きい「華帆海丸」（3.4 トン）という漁船が陸揚げされていた。漁協の資料によると黒島の漁船総数は 8 隻で、大里地区に 4 隻、片泊地区に 4 隻という内訳である。この 2 隻は何れも片泊地区の漁船である。恐らく片泊港は静穏度に欠けるため、車で 10 分ほどの大里港を拠点にしているのだろう。

「海相棒」の船長は山口正人さんという。だいぶ前に U ターンしたようだが、現在は九州電力の発電所に勤務しながら漁業と遊漁案内を兼業している。ちなみに発電所は大里の集落を登ったはずれの県道脇にあり、ディーゼル発電で出力は 320kw である。3 人の職員が交代で働いており、山口さんはそのうちの 1 人というわけだ。

黒島に来た 24 日には大里港の沖合に 2 隻の漁船が停泊していた。翌日の朝にはこの船と

は別に港内に3隻の漁船が横付けされていたことはすでに述べた。山口さんによると、これらの漁船は昨日から黒島周辺に出没する枕崎のまき網船団だという。網船、灯船、運搬船を合わせて5～6隻で構成され、2船団が夜間操業し、昼間は船を停めて休んでいる。まき網は島周辺にいる魚を根こそぎ獲ってしまうため、まき網が来ると魚はほとんどいなくなるのだそうだ。餌になる小魚も獲っていくため、釣りの対象になる魚もいない。わずかに残るのが磯根の魚だという。今に始まった話ではないが、このように黒島周辺の水産資源は島外の漁船によって獲られてしまい、島の漁業は発展しなかった。

山口さんの漁船のイケマには磯で獲ったスジアラが畜養されていた。スジアラは5,000円/kgほどするが、鹿児島県の市場から福岡に行き、香港経由で中国に輸出されているという。

三島村の4つの港（竹島、硫黄島、大里、片泊）は何れも港湾であり、漁港は皆無である。港の不備は漁業の発展を阻害し、結果として島周辺の水産資源が島外の漁民に収奪されるという悪循環に陥っていた。かくして漁協の正組合員は21人に減り（准組合員は56人）、漁協を維持することが難しくなった（ちなみに黒島の正組合員は8名である）。このため、今年（2023年）の4月1日に鹿児島県漁協と合併し、同漁協の三島村支所となっている。なお鹿児島県漁協は3年前の2020年4月に6つの漁協（南さつま、串木野島平、喜入町、錦海、福山町、おおすみ岬）が合併した漁協だ。20人の正組合員を維持するために80歳代の組合員2人には無理して漁業を続けてもらったが、この合併参加で「もういいだろう」と引退を表明されたという。

黒島の直近の年間水揚量は738kg、水揚げ金額は1,209千円にすぎない。魚種別ではイセエビが生産額の8割ほどを占めている。珍しいのは片泊でカメノテが採取されて市場に出荷されている点だろう。ただ、島内の民宿で提供されている水産物は基本的に島の漁師が獲ったものなので、実際の漁獲量はこの数値よりも多いと思われる。

大里港は砂が堆積し干潮時に入港できなかったが、これは沖防波堤の建設によって漂砂が変化し、夏に砂が港の中に入り、冬は逆に外に出ていくことを繰り返しているためらしい。



大里港沖に停泊する島外の漁船（左）、島で一番大きな漁船「海相棒」（右）

老人会とサツマイモ

フェリーが来るまで多少時間があつたので、別ルートで黒島平和公園に向かった。途中、メイン道路から脇にそれた道を登るとすでにサツマイモの苗が植えられた比較的広い畑があつた。畝をたて、マルチが敷かれているので芋焼酎の原料用となるサツマイモである。

ところで、鹿児島県では一昨年からサツマイモ^{もとくされ}の基腐病が発生している。この病気は葉や茎が枯れ、芋が腐敗する病気で、カビの一種である糸状菌の感染で引き起こされる。近年、この病気が九州地方を中心に流行しており、鹿児島県では、2021年には県下約7,700haで基腐病が発生した。2022年は多少減ったものの約3,500haで発生、これは鹿児島県下の作付面積の35%に相当する規模である。黒島でも例外ではなく、このため、本土でバイオ技術によって生産した苗が島に導入され、ちょうど私が乗って来た船で運ばれてきて、役場の出張所で配られたことは先に示したとおりである。

屋久島や口永良部島を望む見晴らしのいい場所から少し下がったところで、6人の高齢者がちょうど昼食をとりながら、休んでいるところだった。一番下にいた夫婦に話を聞くと、70歳以上の人で組織する「大里老人会」のメンバーだそう。ちょうどラッキョウの収穫をしているところだった。ラッキョウの後に、焼酎原料のサツマイモを植えるのだという。

ご夫婦は2人とも島の出身者で、島を出て大阪で働いていた。60歳まで会社に勤め、その後10年間継続雇用され、島に戻ってきて12年が経つという。ご主人は82歳になる。

ご主人の話では、黒島灯台は島の東端の冠山（233m）にたっていたが、山が崩れて灯台が崩壊、その後、平和公園の背後に移されたのだという。この山は神の山だったので、神の祟りが灯台を壊したと言っていた。

ちょっと興味が湧いたので行ってみたくなり、場所を聞くと奥さんがすぐ下にある冠神社に案内してくれた。冠神社も元は冠山の頂上付近にあったが、山の崩壊後、麓の方に移された。この山は修験道の修行の場であり、天狗が祀られていたそう。

島の子供は高校に進学すると島を出るが、その際、この神社の前の木に白い幟を掲げ、島を離れる若者の健康と幸運を祈る習わしが現在も続けられているという。



マルチを敷いたサツマイモ畑（左）、老人会のメンバー（右）

坂を下って大里港に向かう。15時発の「フェリーみしま」に乗り、片泊港を経て、19時50分ごろ、鹿児島港に入港した。鹿児島中央駅近くのホテルに泊まる。

【文献】

三島村教育委員会（2015）黒島平家城遺跡、大里遺跡ほか。村内遺跡発掘調査等事業報告書。

鹿児島国際大学考古学研究室（2021）三島村黒島 大里遺跡2

有吉佐和子（1969）私は忘れない、新潮文庫、新潮社、東京。pp302.

三島村教育委員会（1989）郷土読本 ふるさと三島。

村史編さん委員会（1991）三島村誌、三島村。